

心敬における仏道と連歌道

影 山 純 夫

これまで中世の芸術思想が問題とされる時、藤原俊成・藤原定家から続く諸歌人の歌論や、世阿弥・禅竹の能楽論とともに、心敬の連歌論は大いに注目されてきた。その著『ささめごと』についてはすでに深く研究されているところであるし、『ひとりごと』や『老のくりごと』についても、思想面から取り上げられることになった。

これは心敬の思弁の深さが、連歌論として見事に結実しているからであろう。

この小論では、この心敬の思想を仏道と連歌道という点に焦点をあてて考えてみたい。論述の順としては、まず心敬が仏道及びそれにかかわる思想¹無常観²といかにかかわっていったかを述べ、つぎに心敬の連歌道に対する考え方・姿勢を述べ、最後に心敬の内ですれらがいかに統一的に把握されていたかを考えてみる。

心敬と仏道との関係は、若年の頃より始まる。『心敬詠草芝草抜書』中の自注³によれば、比叡山でかなりの期間仏道修行を行ったようである。それは数年から十数年に及ぶものであつたらしい。心敬は三才で京に上つたが、その理由を明確にする資料は残されていない。がこの入道にその理由があつたのではないかと想像することはできる。

この入道以上に心敬の内面に影響を与えたのは、三十才前後に想定できる権病である。その著『老のくりごと』に

あまさへ、壮年の比より、いたづくこと年久く侍て後は、胸の内さながら筐に入る水のごとく、一の露もとどまらず。

と述べ、『権大僧都心敬集』中の「応仁元年百首和歌」に「薄暮松風」と題し

三十より此よの夢は破れけり

松吹かせやよその夕暮

との歌を残しているように、この大病によつて心敬は世俗への執着を打ち捨て、世の無常を世のあるがままの姿としてとらえることが

できるようになったと自ら言う。心敬が、教学上無常を学び知ったというだけでなく、自らの肉体をもって深く無常を体験したという事実は、まことに重要であるといえる。

加えて永享の乱に始る社会不安である。心敬はこの世の乱れについて『ひとりごと』に述べているが、「民もつかれ、都もおとろへ果てよよろづの道万が一つも残らず」と絶望を隠してはいない。さらに世の中は混乱を深め、心敬の住居十住心院も荒廃し、京の地を離れねばならなくなるのである。寛正本自注『百首和歌』中の五月雨と題す歌の注に

年ひさしく、都ほとりも住あきて、うるさく侍れは、いかなるかたついなかの、あやしのしつかわり屋にも、此世をつくしは侍はやと思たち侍しに、草屋のなか雨に、うちこもり、ひころの心もたへわひ侍れはと也。

と述べるが、旅先の草庵では、ついつい忙しさに心を動かされるといふこともあったのである。

応仁の乱は、心敬の京での生活を完全に奪い去ってしまった。心敬は鈴木長敏の求めに応じて関東へ下ることとなるが、この「なく／＼」（『老のくりごと』）至り着いた武蔵の地も決して安泰ではなく、難を避けて相模国大江山麓の古寺に移り住み、一生を終えることとなった。

このように、社会の激動に身を曝し続けた心敬にとって、世の無常という観念は、精神的にも肉体的にも間違いないものとして存在したといえる。特に晩年の著『老のくりごと』に述べられた罹病による無常観の獲得は、心敬にとって絶対に忘れ得ぬものとしてあ

った。僧という立場の上に、この現実認識が加えられた意味はまことに大きい。その、心敬の連歌論上の意味については、後に述べるところである。

三

心敬の連歌道に対する考え方・姿勢は、当然のこととして当時の連歌界の状況に基づいている。この時期は連歌の七賢時代と呼ばれる時期に当り、創作活動の活発な時期であり、連歌の地方普及も進み連歌享受層の拡大する時期でもあった。心敬にも、連歌が「ちかき世より、さかりにもていて」（『所々返答』）「いかなるあやしの賤屋、民の市ぐらなどにも、千句万句とて耳にみてる」（『老のくりごと』）状態であるという認識があった。しかし、いかに多くの連歌が作られたとしても、連歌そのものの向上にはならないと心敬は考える。隆盛の故に、かえって連歌の質の低下をもたらしているとの判断が、心敬にはあった。

二条良基や救済の時代は、連歌の歴史において重要な時期であった。この二人によって編まれた『菟玖波集』や『連歌新式』は連歌の道に光を与えたが、次第に「名をだに知らぬものになり」「しるべなき道」（『ささめごと』）になっていった。さながらいまは、「壊劫末法の時」（『老のくりごと』）ではないかと心敬はいう。

「このしるべなき道」にしるべを与え、向上の方途を考えることが心敬の連歌論の大きな目標であった。

心敬にとって、このしるべとなるものの一つは、連歌より古い伝統を持つ歌の道であった。

先達語り侍りし。歌をにくみむずる作者の修行こそ心にくも侍らね。いかにも秀歌を胸におきて、その面影を句ごとに含むべきことにや。…(中略)…近來ひとへに歌の心をうかぶ知らぬ人の、二つの道に思ひ分けたるより、連歌の眼は失せて、ただぶつゝかに並べおきたる物に成り行き侍り。

『ささめごと』

連歌は、大方、歌を試て侍らでは、明きらかに界に入がたくや。

『ひとりごと』

さらに心敬は、このように連歌が歌から多くを学ぶだけでなく、同じ道として並び立っていかねばならないと考えていく。

近き世には、歌の道は、さながらすたれ侍れば、せめて此道を、まことしく学びあきらめて、歌の教戒の端をも残し、ますらおあびすの心をもやはらげ、末の世遠く、情をも知らせ侍るべき。

『老のくりごと』

「ますらおあびすの心をもやはらげ、末の世遠く、情をも知らせ」るのは、本来歌の役割であったはずである。しかし「歌の道は、さながらすたれ侍れば」連歌がその役割を引き受けるしかない⁽³⁾と心敬は考える。ここには従来の連歌に対する考えとは違ったものがある。連歌の存在の強い主張があるといえる。

連歌は、すでに『万葉集』巻第八に大伴家持と尼との作が採られているが、当初から頓智的・言語遊戯的要素が強く、長い間歌よりは一段劣るものと考えられてきた。準勅撰集『菟玖波集』の編者であり、かつ数々の連歌論書の著者である二条良基においても、この考えは完全には克服され得ていないようにも思える。心敬の歌道と

連歌道と同じ道として並べ立てていこうとする考えは、心敬によって度々述べられるが、それは依然残っている連歌を遊(すさび)とみる考えに対するアンチテーゼであり、心敬の強く認識するところであった。

諸々の芸の道においては、その芸に精神的にも肉体的にも、いかに深くかかわってきたかが問題とされる。これはすでに『源氏物語』に用いられた道が、学問としての文章の道、技芸としての管弦の道・書の道等々人間の「執する」ところに用いられたということからも明白である。この道の「執する」ことについて、中世の歌人達もいろいろと述べている。定家は、その著『毎月抄』の中で

此道をたしなむ人は、かりそめにも執する心なくて、なをざりによみすつること侍るべからず。

と述べ、さらに続けて、歌を難せられて死んだ人の話や、歌を盗まれて成仏し得ない歌人の話に言及している。また順徳帝は、『八雲御抄』に

素性法師は、歌に執をとどめて、度々人の夢に入り、長能は歌の難をおひて、思ひじに、しにけりなどいへり。あるひは命にかへて一首秀逸を得たる事もあり。よくく、此道には心をふかくすべきなり。

と述べ、又鴨長明は『無名抄』に、歌に執することの深かった人々の次のような話を書いている。

道因法師はあまりに道に志が深く、七、八十才まで秀歌を作り出すことを祈って住吉神社へ詣で、老いても学ぶことを忘れず、『千載集』に十八首の歌を採り上げられれば、夢の中にまで現れ喜ん

だ。宮内卿はあまりに歌に志が深かったため命を落し、登蓮法師は歌の故事を明らかにするためには一刻を置かなかつた。登蓮法師を評して長明は、「いみじかりける数寄者なり」と述べている。

このように、中世においては歌に「執する」ことが非常に重要に考えられ、歌に命をかけることを賞讃するまでに至つた。このような歌道に対し、連歌道の差異を述べたのが、二条良基であつた。

歌の道は昔の人あまりに執心し侍りし程に、或は一首に命をかね、難をおひては思ひ死にしたるためしも侍りき。連歌はさやうの事は侍らぬ事なり。たゞ當座の逸興を催すまでなれば、さのみ執着執心なき事なるうへ……

『筑波問答』

連歌は「當座の逸興を催すまで」ととらえる良基にとつて、作句に命を賭けるなどということは、とても考えるところではない。連歌自体が、主に複数の会衆によつて成り立つ一座の即興的な作歌活動であるかぎり、遊(すさび)の要素を持つのは当然であるし、命を賭けるといふ場面を想定し得ないのも当然であろう。しかし連歌の芸術化の進む時期には、また連歌に個人的創造空間が認められていくところ(独吟等として)には、苦吟や難吟からさらに死という状況が、歌道においてと同様に連歌道において考えられ得ることになる。連歌道の確立に情熱を懐く心敬に、歌道で重視されたこの「執する」ことが見逃されるはずはない。心敬は『ささめごと』に一節をたて、

大聖文珠の化現などは知り侍らず、やす／＼と出で来べき道と見えすや。心によしあしの分別もなく、艶にはづかしき道とも知らざらむ輩は、やすくや侍らむ。

紀貫之は一首を廿日に詠ぜしとなり。

宮内卿は血を吐きしといへり。

公任卿はほの／＼の歌をば三とせまで案じ給へるといへり。

長能は歌を難ぜられて死す。

と記し、また同じく『ささめごと』に

いかにも道を高くおもひ幽玄をむねとして執心の人、この道の最用なるべし。

と述べている。心敬にとつて、連歌の作句にいかにか深くかわつていくかは、誠に重要な問題であつたのである。

このように、連歌に深く心を懸け、いまだ不完全な連歌道を確立しようとする心敬の意欲は並々ならぬものであつた。この確立のためには、連歌から遊(すさび)の要素を排除し、「執する」ことの賞揚など、歌道から積極的に養分を吸収することが必要であるとした。そして衰えた歌にかわつて、連歌により「ますらお免びすの心をもやはらげ、末の世遠く、情をも知らせ」んとするのが、連歌道にかかわる心敬の目標となつた。

四

天才的歌人・連歌師であり、かつ仏道者であつた心敬にとつて、連歌道と仏道との関係を、いかに論理付け統一してとらえるかは、一大問題であつた。この問題の解決に失敗するならば、心敬の精神基盤が危うくなってくる。心敬の連歌論書を繙く時、この大問題を背負い込んだ心敬の姿を窺い見ることができ。

仏道と諸芸道の関係については、心敬の先人達がいろいろと考え

述べている。そこでこれら先人達の考えを手懸りに、心敬の考察に入っていく。

まず、『正徹物語』中に僧慈円についての興味深い逸話がのっている。慈円の兄の一乘院門跡が、慈円があまりに歌道に深入りしすぎるのを見かねて、「日夜風月のたはぶれをもてあそばせ給ひ候事、且は釈門の儀にも背き、還りて凡俗の躰に准ぜられ候事、無^三勿躰^一候」との苦言を提したところ、慈円は

皆人に一のくせは有るぞとよ

これをばゆるせ敷嶋の道

との歌でこれに答えたという。仏道と歌道が互いに相容れないところを持つことは、一乘院門跡だけでなく慈円の認めるところであった。だからこそ慈円は、歌を作るのは一つの癖であると言い遁れをせざるを得なかつたのである。

この仏道と歌道が相容れないところを持つのではないかという反省は、言い換れば、歌道は生きる上で何ら役に立たないのではないか、さらには入道の妨げになるのではないかという反省は、すでに平安時代からあつた。歌を狂言綺語とする考えがそれである。この反省に対する解として、歌道仏道一如論(歌の修行を積むことは、仏道修行を積むことと何ら異るところではない。成仏につながるの論)や歌道方便論(歌道の修行は入道の方便であるとの論)が述べられてきた。しかしそれが完全な解答でないが故に、その反省は繰り返されてきた。生きる道としての歌道の存在が問題とされる時、僧も俗人も一切区別無くその反省が要求される。一切の歌人が、この間に取り組まねばならないのである。

京極為兼は『為兼卿和歌抄』の冒頭で、「此の道は浅きに似て深く、易きに似て難く、佛法ともひとへに候」と述べ、心敬の師正徹は、「和歌仏道全二無」(『正徹物語』)と述べている。又心敬の先輩宗硯は「古今連談集論」に

末世には人の衰へもてきて、仏法には愚あれば、天竺の陀羅尼の詞を唐土にては詩賦^(ウタ)しふのあそびとがうす。此嶋にては、しふの道を和して歌となせり。歌道より人の心をやはらげて、佛ちにいれんがため也。

と述べているが、これは歌道方便論に無任の和歌陀羅尼論をないまぜにしたものように思われる。このように各人が各様の考えを述べてはいるが、既成の考えを持ち込むばかりで、かえって歌道の権威付けに用いられる傾向があるのは否定できない。僧である正徹からも、何ら新しい答えを聞くことはできなかつた。それではこの間に心敬はいかに取り組んでいったのであろうか。

歌道に修行が必要であり、その修行は作歌行為そのものの修行であるとともに、その作歌行為の主体である人間の修行であるとの考えが生れるのは自然である。又、歌道仏道一如論や歌道方便論の成立は、この考えに関連している。しかし歌道の修行が仏道修行と同一とは決して言い得ないのであって、互いに相容れない部分を持つてあろう。様々に論述をなした歌人達は、各自の歌論において、歌人としての在り方は問題としても、人間としての在り方を問題としたとは言えないと思われる。

心敬も経信の言葉「和歌は隠遁の源、菩提をすむる直路也。眞如實相の理、三十一字におさまれり」や俊成に対する住吉大明神の

言葉「歌道をおろそかに思ひ給ふ事なかれ。此の道にて必ず往生をとげ給ふべし。歌道即身直路の修行也」(『ささめごと』)を称揚する限りでは、それまでの歌人達の位置とそれほど異ならないようにも思われるが、その間を自分のものとして考えている点において、それまでの歌人達と大いに異っている。以後このことについて考察していく。

先に、歌人達は歌人としての在り方は問題としても人間としての在り方は問題としたとは言えないのではないかと述べたが、心敬はまず人間―特に心―の在り方を問題とする。

この道に入らむともがらは、先づ艶をむねと修行すべき事といへり。艶といへばとて、ひとへに句の姿・言葉の優ばみたるにはあるべからず。胸のうち人間の色欲もうすく、よろづに跡なき事を思ひしめ、人の情けを忘れず、其の人の恩には、一つの命をも軽く思ひ侍らん人の胸より出でたる句なるべし。

『ささめごと』

歌人・連歌師に、これ程の倫理上の要件を求めた者は、他に見いだせないであろう。

心敬は先に述べたように、歌道・連歌道における「執する」ことを賞賛する。しかしその「執する」人々が、歌人や連歌師として最も優れた人々であるとは心敬は考えない。心敬は歌人として、慈鎮・西行を「歌よみ」とし最も高い評価を与えているが、その西行について、心敬は次のように述べている。

西行上人を、もろくの明聖に越えて不可説々々の上手、例の人丸の再誕とのみ勅定ありしも、たとへば、世俗の凡情を離れ

たる胸の内を仰侍なるべし。

『老のくりごと』

西行が定家・家隆などの「明聖」より高く評価される理由の心敬流の解釈は、「世俗の凡情を離れたる胸の内」という、人間の内面性によるというものであった。心敬のこの心の重視は、連歌師宗砌の批判としても述べられている。

宗砌法師風鉢事うけ給候、まことに、てたりたくみに、強力なる處、ならふ作者見え侍らす、されは其世には、ことのほかほまれをえ侍り、しかはあれとも、ねんころに見給へく哉、この好士もひとへに、俗人に侍れば、むねのうちますらおにて、弓馬兵杖の世俗に日夜そたち侍て、さらに世間の無常遷變佛法のかたの學文修行の心さし一塵もなく、かけ侍るゆへにや、てたりのみにて、句ともに、面影余情不便のかた侍らす哉。

『所々返答』

心敬の宗砌批判の中心は、「むねのうちますらお」にある。このような批判が生れるのは、心敬にとって歌・連歌とは、「無常述懐を心言葉のむね」(『ささめごと』)とするものであるからに他ならない。飛花落葉というような自然現象にも無常を觀る心が必要とされるのである。心敬は、「念々の無常とて、物ごととにふれて忘れざるは、ぼさつ大悟の位なり」(『ささめごと』)と述べるが、その菩薩大悟の位にまで歌人・連歌師も至りつかねばならないと心敬は考える。その位に至り着いたのが、「歌よみ」である西行なり慈円なのであった。

心敬の歌・連歌に対する考え方は、すべて心に収束する。心敬にとって歌・連歌とは、「無常をもすゝめ、一粒の涙をも落し、物の

あはれをも知るべき」(『老のくりごと』)ものに他ならない。まさに無常述懐を旨とするものでなくてはならないのである。歌・連歌がこういうものとしてある時、歌・連歌の優劣はその作歌主体たる歌人・連歌師の心の在り方に左右されることとなる。心敬の歌・連歌の定義からして、この心の重視は当然の帰結であったといえる。

心もち肝要にて候。常に飛花落葉を見ても。草木の露をなかもても。此世の夢まほろしの心を思ひとり。ふるまひをやさしく。幽玄に心をとめよ。春の曙秋の夕暮ときとるくちまねにするはいたつらこと也。春の曙をも秋の夕をも。心をとめたる人のいひ出すは。同し夕曙なれともかくへつの物也。心はふとく欲心をかまへ。あたゝかなるあてかひにて。こと葉はかりにて。うき。つらき。かなしき。あちなき。世をいとふ。身をすつるとのみいへとも。かたはらいたくこそ候へ。

『心敬僧都庭訓』

心敬によれば、言葉には心が現れるものであるから、作者の心から生み出されるものでない限り言葉が定着せず、本当の作品とはなり得ない。「胸のうちより出たる」(『心敬僧都庭訓』)ことが重視される。しかも胸のうちが清くあることが必要とされるのである。心敬が閑人を尊重するのも、やはりこの理由からである。

閑人とは、閑居幽栖の人物、清い胸の内の所持者であった。このような閑人から、まことの歌人・連歌師が生れるのである。「いかにばかり堪能幽玄の好士も、心地修行おろそかならむは、至りがたき道なり」(『やさめごと』)と心敬は述べるが、この「心地修行」

とは、いわばこの閑人の境地に近づくための、基本的な条件としてある。この「心地修行」は、創作のためだけでなく、鑑賞のためにも必要とされる。優れた歌を理解する人は、清き胸の内の持主でなければならぬ。そのような作者と鑑賞者の間において、初めて真の創作と鑑賞が成立すると心敬は考える。心敬の心付の重視は、この基本的な考えの上に成り立っている。本来「心地修行」とは、仏道において強く求められる事柄であったはずである。心敬の連歌論には、こういった仏道上の事柄が違和感無く連歌道の事柄として述べられている。

心敬において連歌道は、連歌という芸の範囲で完結する「道」の範囲を突き抜け、人生を導き得る「道」にまで高められた。心敬は、芸道の求める心の獲得を、連歌師生活の上だけではなく人間生活全体の上で考え、人間全体にその批判の対象を広げたのである。ここで連歌道と人生の道である仏道とが深く結び付くこととなった。そしてこれにより、僧としての心敬しかも無常体験を持つ僧としての心敬と、天才的歌人・連歌師としての心敬という二つの顔を持つ心敬が存在し得る基盤を作り上げたのである。

しかし論理としてはともかくとして、生身の人間としては、その連歌道と仏道との間の平衡感覚を失う可能性は十分に在る。心敬が連歌論の中心問題として心の在り方を問題として突き詰める時、連歌から心への道という連歌道が変質し、常に心が問題となり、連歌そのものを欠落させる危険性を孕むこととなる。心敬にとって連歌とは、「朝の露・夕の雲の消えせぬ程のたはぶれ也。はかなきすさみ」(『やさめごと』)として、捨て去らねばならない物となって

しまう。この言葉が連歌論書である『ささめごと』に書かれねばならなかった意味は重大である。連歌とはなぜに存在すべきなのか、なぜに存在する価値があるのかという、連歌道における永遠のとも言うべき問題に対して、心敬は僧として、深い無常体験を持つ者として、歌とは連歌とはたはぶれ、はかなきすさびにすぎないとの結論に到達せざるを得なかったのである。

しかしこの結論に達したからといって、心敬にとつて血肉となつた連歌を捨て去ることはできない。

しかはあれど、猶深く思ひとき侍れば、いづれの法いかなる教へにも、ながく凡聖のへだて侍らず。さま／＼の方便の門にまどひて、目前の十界をはなれて、三世にめぐると見る人こそおろかに侍れ。それも明らかなる眼よりは同一性なれば、あやまる道なかるべし。もとより太虚にひとしき胸の中なれば、いづれの道をもてあそび、いかなる法をつとめても、其の相とまるべきにあらず。三世に主なき萬法なり。たゞ幻の程のよしあしの理のみぞ、不思議のうへの不思議なる。それも天然法爾、あなむつかしの心づくしや。何事もさもあらばありなむ。

『ささめごと』

と、連歌道そのものの存在価値の判断を棚上げし、一切の道の存在を是認することによって、連歌道を救はざるを得なかったのである。そしてその後、心敬はいくつかの連歌論書を書いて、連歌道の存在意義については樂觀視していたかのようにも見える。

此道にうるとき人は、四のときのうつりゆき、万堺の上に、色々さま／＼のえんふかきことほりをもしらす、たゞ壁にむかひて

遊をかふりて、一生ををくれりなといへり、いかはかりの権者、学生などゝて、かしこかましき人も、哥道より見れば、優艶のかたをくれて、あさきことのみおほしと也、柿本人丸云、此國にむまれて、此道をしらすらんは、空とふ鳥のはねなく、水にすめる魚のひれなきかことしといへり、此道を佛法などより劣に思ひ給へからず、天竺にては、陀羅尼梵語を説、我朝には、神明和光爲化度和哥をのふ、これ則此國の陀羅尼なり。

『芝草句内岩橋下』

と連歌道の意義を積極的に打ち出している。連歌道と仏道との関係についての考察は、その最も早い時期の連歌論と考えられる『ささめごと』に、最も深いものを見ることが出来る。その理由に、当時の社会状況や心敬自身の心理状況を考えることができるが、今ここではそのことにふれない。その連歌道や仏道の存在にかかわる問題が、『ささめごと』において一応の結論をみ、問題意識がすぐに失われたとは決して考えることができない。それは心敬が、その後半生を、積極的に連歌道中心に送ろうとしたと考えることができる。ことによる。心敬の後半生は、「此道に、昔はいさ／＼心をかけ、古人明聖の席などにも有りしこと侍しかど、恐わが法の道などに暇を得ず」と、華やかだった歌・連歌の創作活動を打ち捨て一途に仏道生活に心を懸け、「白駒のかけ、飛鳥の跡なき斗を思ひしめ、世俗の六塵を払ひ、一大事当来のみ待かね侍」（『老のくりごと』）状態であった。というよりも、心敬がそうありたいと願っていたといった方がよい。実際この頃心敬は、毎年歌会・連歌会に出席するなどの活発な活動をおこなっている。にもかかわらず心敬に

こう書かせた裏には、依然歌をたはぶれ、はかなきすさびとする考
えが働いていると見ることが出来る。しかし歌・連歌を捨て去り得
なかつたことも事実である。

京の乱を厭ひ、東国へ、さらに東国の乱を避けて大山山麓に移り
住んだ心敬は、その著『老のくりごと』に

ひたすら便りを失ひ侍る心細さの余りに、しばしの愁へをもの
どめ侍やと、忘はて侍る浅はかの言の葉の塵共の筆のすさみ、
いたづらごとゝ思ひ捨て侍れども、たとへば、山野にひづめを
殺し、江河にうろくづを漁り、兵杖をとり万人を失へる輩も侍
れば、ひとへに慚愧懺悔になぞらへ、ひそかに和尚に胸の罪を
消ち侍る斗也。

と述べているが、連歌についての論述を慚愧懺悔行為として、許容
を求めようとしている。ここでは『ささめごと』に述べられた解答
は、本質的な解答としての役割をはたしていないのである。

これまで、連歌師としての役割を確立するという社会的な要請を身に
受けた心敬を、独自の人生体験や僧という立場を持つ心敬という個
人の上にとり位置づけるかという精神的営為を、心敬の連歌論書の上
に追ってきた。そしてその心敬自身の位置付けの試みがほとんど
成功しながら、そこに安住し得ない、心敬の姿を見出し得たのであ
る。そしてその反省の深さは、これ以前の芸道論書には決して見出
し得ないものであった。

五

先に述べた心敬の反省の深さは、まずもって心敬自身の個人的な

精神の要求によるものであるとともに、歴史的な要求によるもの
もいえる。それは、例えば心敬の美のとりえ方に現れている。「艶」
というような外面的美を表す言葉に、内面的精神的な意味を与え、
「水ばかり艶なるはなし」（『ひとりごと』）とする美的意味内容
の転換は、心敬が歌人・連歌師に心の清さを求めたところになしと
げられたが、これは後に「わび」や「さび」が従来の言葉の意味を
転換し、美的理念としてとらえられていくのと同様の姿といつてよ
い。そして心敬の連歌論は事実武野燭などを通して茶の湯の精神
に大きな影響を与え、美的理念である「わび」や「さび」として結
実していくのである。これらの考察については、後日改めて発表す
ることとしたい。

註

(1) 心敬の連歌論については、『ささめごと』を中心に、当然の
こととして国文学の方面から研究されてきたが、日本思想大
系第23巻『古代中世芸術論』に『ひとりごと』と『老のくり
ごと』が取り上げられることになった。

(2) 「杉の木間に雪をみえたる

明初る横川の遠の比良の山

此句は、彼あたり見侍らざらん方は、ひとへに心をえかたか
るへし、されども、横川の北にあたる比良の峯には、富士
などの如く、雪の消ぬ山なれば也、拙者年久しく見侍しまゝ
の躰を申」

(3) 『古今和歌集』仮名序には次のようにある。

「やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろづのこと
の葉とぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものな
れば、心におもふことを、見るもの、きくものにつけて、い

ひいだせるなり。花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、おとこ女のなかをもちやらげ、たけきものゝふのこゝろをも、なぐさむるは哥なり。」

(4) 狂言綺語という言葉は『白氏文集』の「願以今生世俗文学之業狂言綺語之誤 翻為当来世々讚仏乘之因転法輪之縁」に基づくと考えられるが、ここにすでにこの両論が生み出される萌芽を見出し得る。

歌道仏道一如論の一例として『正徹物語』から引用する。

「俊成卿老後に成りて、さても明暮哥をのみ讀みあて、更に當来の勤めなし。かくては後生いかならんと歎きて、住吉の御社に一七日籠りて此事を歎きて、「もし哥は徒ら事ならば今よりこの道をさし置きて一向に後世の勤めをすべし」と祈念有りしが、七日に満ずる夜、夢中に明神現じ給ひて、「和歌仏道全二無」と示し給ひしかば、さては此道のほかに佛道を求むべからずとて、彌此道を重き事にし給ひし也。」

又歌道方便論の一例として『西行上人談抄』から引用しよう。

「連阿滿七十の年、今は餘念なしと思ひて、家を出でて念佛門に入しより專一向に淨土を念むるに、和哥を好みし心にて道心を好めば、まことに發心進み易かりけり。」

但、この發心は和哥の心より進みて易きにあらず。月讀の宮の御方便にや。その故は、彼六年祇誠の旨神感の餘りに、蓮阿遂には往生を願はんずる者と知見ありて、祈り申し和哥を好ませてその心を縁として發心に進み易からせて、往生の縁を與へんと御方便ありけるにや。」

ここでは連阿の個人的信仰心という要素が加味されてはいるが、基本的には方便論以外の何ものでもない。

(5) 『沙石集』卷第五本(一一二)

「大日經ノ卅一品モ、自ラ卅一字ニアタレリ。世間出世ノ道理ヲ、卅一字ノ中ニツ、ミテ、佛菩薩ノ應モアリ、神明人類ノ感モアリ。彼陀羅尼モ、天竺ノ世俗ノ言ナレドモ、「陀羅尼ニ」モチキテ、コレ「ヲ」タモテバ、滅罪ノ徳、拔苦ノ用アリ。日本ノ和歌モ、ヨソツネノ詞ナレドモ、和歌ニモチキテ思フノブレバ、心感アリ。マシテ佛法ノ心ヲフクメラシハ、無「疑陀羅ニナルベシ。」

引用文献は次の通りである。

- 『ささめごと』 日本古典文学大系「連歌論集俳論集」
- 『所々返答』 心歌集論集
- 『百首返歌(寛正本)』 〃
- 『芝草句内岩橋下』 〃
- 『心敬僧都庭訓』 続群書類従卷第四百九十七
- 『老のくりごと』 日本思想大系「古代中世芸術論」
- 『ひとりごと』 〃
- 『権大僧都心敬集』 続群書類従卷第四百四十七
- 『毎月抄』 日本古典文学大系「歌論集能楽論集」
- 『八雲御抄』 日本歌学大系第三卷
- 『筑波問答』 日本古典文学大系「連歌論集俳論集」
- 『正徹物語』 「歌論能楽論集」
- 『為兼卿和歌抄』 〃
- 『古今連談集論』 古典文庫「宗御連歌論集」
- 『古今和歌集』 日本古典文学大系「古今和歌集」
- 『西行上人談抄』 中世の文学「歌論集一」
- 『沙石集』 日本古典文学大系「沙石集」